

教えて センセイ

島村恭則先生に聞く〈現代民俗学、ヴァナキュラーの話〉

喫茶店のモーニング、
家庭の中のおまじない、B級グルメ…。
田舎の伝承だけではなく
身近な〈俗〉Ⅱ「ヴァナキュラー」も
研究するのが現代民俗学です。



島村恭則さん (しまむらたかのり)

関西学院大学社会学部・大学院社会学研究科 教授。世界民俗学
センター長。専門は、現代民俗学、民俗学理論。1967年、東京都生まれ。
筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科単位取得退学。博士(文学)。
韓国・翰林大学校客員専任講師、国立歴史民俗博物館民俗研究部、
秋田大学准教授、東京大学大学院客員教授などを歴任。著書に、「
みんなの民俗学」(平凡社)、「民俗学を生きるーヴァナキュラー研究への道」
(見洋書房)、「日本より怖い韓国の怪談」(河出書房新社)など。

田舎に行かずとも、都会にも〈俗〉はたくさんある！

民俗学というと、柳田國男の『遠野物語』を思い起こすせいか、田舎の伝承を研究する学問だと思っている人が多いのではないのでしょうか。でも、民俗学はそのようなものだけではありません。もっと広くてカジュアルで現実的な学問なんです。

そもそも民俗学とは、「人間(Ⅱ民)の〈俗〉なるもの」に着目する学問。〈俗〉とは、権威や公式的な制度から距離があるもの、合理性では割り切れないもの。いわば、人間の本音の部分です。みなさんも、制度や合理性だけで行動しているわけではないでしょう？

かつての民俗学者は、自分たちが調べたい〈俗〉が農村の民間伝承(妖怪、伝説、祭りなど)にたくさん含まれていると思ったんです。でもよく考

関係なく直接、引越しても大丈夫」ということになるんです。なぜなら方違神社は河内、泉州、摂津の三国の境に位置していて、方角を超越しているという信仰があるからです。これも今に生きるヴァナキュラーですね。

家庭の中のヴァナキュラーもあります。ある学生は子供のころ、母親から「はよ寝ないと箕面のおばさんが来るで」と脅かされるのが定番だったそう。「箕面のおばさん」というのはナマハゲのような来訪神をヒントに子供をさっさと寝かし付けたいお母さんがつくり出した化け物で、学生は「とても不気味で、すぐに布団に入った」とか。これは現代の家庭で生まれたヴァナキュラーです。

また、長距離トラックドライバーは、仲間同士でSNSの音声チャットを活用して、ちょっとした会話を楽しみ、道路情報を交換し、「さっき〇〇あたりでスライド(すれ違うの意味)しましたね」などと盛り上がると思います。これ自体が長距離トラックドライバーのヴァナキュラーなのですが、さらに彼らはSNSがない時代にも、無線で仲間とつながり助け合っていました。その高出力CB無線は、実は違法で決して称賛はできません。ただ、彼らにとって、仲間とのつながりは必要不可欠なもの。このようにヴァナキュラーは、制度では用意されていないものを、自分たちの必要に応じてつくり出していくという特徴もあります。

地域の「あたりまえ」から、
魅力をすく上げるのも、民俗学の力

先日、奄美大島へ講演のために出かけました。まず地元の古本屋に立ち寄ると、店内のソファにお客さんがどんどん集まってきてみんなしゃべっているんです。「こういうのを何というんですか」と聞くと「ゆらい」だと。「寄り合い」の方言ですね。次に、その話を出演した地元のラジオのパersoナリテイの方になると「そうそう！奄美では島中で、ゆらって“ます。仕事終わりに、浜におりて、”ゆらう“んですよ」と教えてくれました。みんな夕方を見ながら、一日の出来事をしゃべって、”ゆらう“なんて、現代のユートピアのようなすごいヴァナキュラーじゃないですか。でも、地元の人にはあたりまえすぎて着目していない。それで、講演会で「奄美のゆらい文化はすばらしい。これをウリにしない手はない」と提案しました。ゆらい文化があれば、今の行政が必要としているコミュニティの助け合いも

えてみると、現代の私たちの普段の暮らしの中、都市に生きる人々の中にも、〈俗〉はたくさんあるわけです。そこで田舎の昔話だけでなく、現代の身近な〈俗〉Ⅱ「ヴァナキュラー」にも範囲を拡大して研究しようというのが現代民俗学です。ヴァナキュラーとは、英語で〈俗〉の意味。古くさい風習を扱っている学問と誤解されがちな「フォークロア」に代わって、この言葉を使います。それでは、現代民俗学における、身近なヴァナキュラーの例を見ていきましょう。

たとえば引越しをするとき、「方角が悪いから」といったん東方向にある友人宅に泊まって北方向の新居に移る、なんていう人がいませんか。これがヴァナキュラーです。でも、いったん友人の家に泊まるのは、合理的でないし面倒でしょ(笑)。それをやらずにすむ方法があつて、堺に方違神社という神社があり、その神社の砂をもらってくれば「方角の良し悪しを浴びさせることはできるんですよ」。

奄美大島の「ゆらい」は特殊な地域でのヴァナキュラーだと思われたかもしれませんが。でも、関西にもよく似たヴァナキュラーがあります。喫茶店のモーニングがそれです。下町を中心とした近所の喫茶店でのモーニングは、単に朝食をとるためだけでなく、コミュニケーションが目的になっています。近所の人たちが集まって、うわさ話をしたり阪神タイガースの悪口をいったり孫の自慢話をしたり。みんなで、”ゆらって“いるんです。

さて、「そんなのも民俗学なのか！」と少し興味を持ってもらえたら、身のまわりのヴァナキュラーを探してみませんか。「あたりまえだけど、よく考えると珍しいもの」をみつけるのがコツ。たとえば、札幌ラーメンです。なぜ札幌ラーメンが味噌味なのか、考えてみれば不思議ですよ。高度経済成長期の札幌。単身赴任のサラリーマンが多く、彼らがラーメン屋で「味噌汁出してよ」といったらしい。ラーメン屋の大将は「うちはラーメン屋だよ」といいながら、「それなら味噌味のラーメンを」と売り出して大人気になったのが始まりとも伝えられています。B級グルメにはヴァナキュラーな要素が多いですね。

「新しい靴は必ず午前中におろす」「午後新しい靴をおろすときは、おまじないとして靴の裏にらくがきをして汚す」といったヴァナキュラーも多くの家庭で見られます。なぜ、午後新しい靴をおろすとき、らくがきが必要なのか。それは、かつての葬式は午後に出棺し、その際に新しい草履を履かせたため午後の新しい履物は死を連想させ、避けなければならないとされたからです。このようなヴァナキュラーの由来を調べてみるのも、「へー、そうだったんだ」という背後が見えてきて、おもしろいですよ。



写真上／新しい靴を午後におろすときには、裏にらくがきなどをしてわざと汚す。家庭の中のヴァナキュラー。
写真右／現代民俗学のおもしろさに触れられる島村先生の著書をぜひ。



写真上／「ゆらい」というヴァナキュラーがある奄美大島では、居酒屋などの看板にも「居酒屋〇〇ではなく、ゆらい処〇〇」とか煮込料理「ゆらい処」などと書かれている。
写真左／喫茶店のモーニングを通して人々がコミュニケーションをする、関西のみならず都市の下町に多いヴァナキュラーのひとつ。